

「若年性認知症」といわれている方々が増えている

最近、「つどい場さくらちゃん」に介護者が来られる中で感じるのは、「介護」を受けられる方の年齢が若い方が増えているということ。

ご主人の介護が始まられるのが、ご主人が「定年」を迎えられる時期前後。組織に属され働き続けられ、真面目に仕事一筋のかたが多いようです。「定年」という言葉の「ストレス」。奥さまの場合、子育て一段落、良き妻・良き母・良き嫁をして来られたやはり真面目な方が多そうです。やはり「ストレス」。

「ボケ」「痴呆」という言い方が普通だったのが2004年3月の「日本老年医学会」での「差別的」とあるとの問題提起を受け、厚生労働省老健局が2004年12月24日から行政用語を「認知症」に変更。この「症」が付けば「症状」の「症」なので、「病気」。そこから「早期発見」「早期治療」をうながされてきた感があります。〈薬〉が「進行を遅らせる」というあやふやな言い方で、すぎる思いの本人・家族が薬を飲ませはじめたのでした。12年前からはじめさせてもらった「つどい場さくらちゃん」に来られる介護者・介護職の方々から〈薬〉〈徘徊〉という言葉が盛んにきかれるようになりいつも〈?〉〈?〉の連続でした。そもそも、〈徘徊〉という言葉もヘンです。「あてもなくうろつく」とありますが、本人は「快社へ行かなアカン」「子どもが帰ってくるのに晩ご飯の買い物行かなアカン」理由があって飛び出し途中でわからなくなっている「迷子状態」。〈薬〉を飲んだ後、形相が変わり、幻覚が見え興奮して飛び出す・・・等、本人をちゃんと観察できる家族はその変化をキャッチして医師に伝え飲ませるのを止めて元通りに落ち着いたと何人もの家族からきいています。世の中こそって加齢によるもの忘れと「認知症」は違う・・・早期発見・早期治療＝薬投与。自分の中の変化は自分が一番わかっているししゃいます。その不安を身近な大切なかそくにこそ知られまいと、心配かけたくない「取りつころう」のです。「若年性認知症」といわれている方も脳のどこの部位にダメージを受けたかで対処は違うはずなのに、・・・「誤診」「誤投薬」で悪化する。家族はその変化にあんなにしっかりしていた家族に、「しっかりして!」「そうじゃない!」と声を荒げる。本人はもっと混乱する、若いだけに体力があるので飛びだされたら家族は根を上げる・・・「介護施設」はほとんど受け入れてくれない、困った家族の選択肢が「精神病院」。この現実の多さに愕然とします。

「介護」だけでも、「医療」だけでもひとを侍せに出来ない。

ご主人の「介護認定」を受けず、飛び出しに毎日付き合い5年間、ヘトヘトになって、ご自分が階段から転がり落ちてやっと申請して出た初めての認定結果が「介護度4」の奥さん。根底にあったのが知られたくない・・・言い回しが変わっても「差別」の意識は変わりません。

〈認知症〉は〈病気〉ですか？